

日本の中高等教育に所属する英語科教員の資質能力の探究-B. Kumaravadivelu が提唱する KARDS をフレームワークにして、中高大一貫教育に属す M 教諭の事例から-

渡邊 大太

1. 研究背景と課題

現在、日本の中高等教育における英語科教員は、従来の「大学入試や偏差値への対応」を維持しつつ、同時に社会的要請である「英語 4 技能（特に発信能力、Communication Skills）の育成」の両立を迫られている。しかし、中央教育審議会（2015）等の既存指針は汎用的な記述に留まり、英語科特有の専門性は「言語運用能力」の提示に限定されている。また、教員の資質能力に関する先行研究の多くも他教科と共通する一般的なスキルの提示に終始しており、英語科教員が直面する現場の文脈や教科特有の特異性を十分に反映できていない。

2. 研究目的

本研究の目的は他教科とは異なる英語科特有の社会的背景や専門的特性を鑑み、日本の中高等教育における英語科教員の資質・能力の実態を、教員自身の視点から主体的に可視化（Bottom Up）することである。画一的な能力リスト化ではなく、現職教員が自らの専門性をどのように省察し、更新しているのかを明らかにし、そのプロセスを説明する動態的モデルの構築を目指す。

3. 理論的枠組み

本研究では、Kumaravadivelu (2012) が言語教師教育の概念的枠組みとして提唱した KARDS（Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, Seeing）モデルを採用する。KARDS は教員が外部からの理論を無批判に伝達する存在ではなく、自律的かつ自己変革的な存在（self-determining and self-transforming individuals）へと成長するための基盤を提供する。このモデルは、グローバル化に対応する 5 つの Post（Post National, Post Modern, Post Colonial, Post Transmission, Post Method）の視点を背景に持ち、その理論的基盤は、Particularity, Practicality, and Possibility の 3 原理に支えられている。具体的な構成要素は専門的・個人的・手続き的知識基盤である【Knowing】、学習者のニーズや動機・自主性を分析する【Analyzing】、教師のアイデンティティ・信念・価値観を内省する【Recognizing】、実際の教授行為や理論化・対話を指す【Doing】、教育行為を多角的視点から捉える【Seeing】の 5 モジュールから構成され、これらは独立しつつも密接に有機的関連性を持っている。

4. 研究方法

本研究は、質的調査によって理論を構築・深化させた後、量的調査によってその知見を検証・補強する「探索的連続配置デザイン、Exploratory Sequential Design (Creswell & Plano Clark, 2018)」を採用する。本稿では、第一段階の質的調査の結果を報告する。調査対象は中高一貫校に勤務する英語科教員 3 名であり、本稿ではその中から現職に約 20 年、通算 30 年以上の豊富なキャリアを持つ M 教員の事例に焦点を当てる。調査では、約 90 分間の半構造化面接を実施し、KARDS 各要素の相互関係や、それぞれの要素を教員自身がどのように捉えているのかについて詳細に尋ねた。得られた発話データに対して、大谷（2019）が提唱する SCAT（Steps for Coding and Theorization）を分析手法として適用した。SCAT は、テキスト中の注目語句の抽出、言い換え、テキスト外概念の付与、テーマ・構成概念の特定という 4 ステップを通じてストーリーラインを紡ぎ出し、現職教員の教育実践を精緻に理論化するのに有効な手法である。

5. 分析結果と考察

SCAT 分析の結果、M 教員は『共にあること（関係）』を自らの理論とする「自律的な実践理論家（Theorizer）」として位置づけられた。以下、RQ1：英語科教員の視点から日本の中高等教育において、KARDS の各要素（Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, Seeing）は、相互にいかなる関連性を有しているか？ RQ2：日本の英語科教員は、KARDS の各要素を自らの経験や教育現場の文脈において、どのように定義し、意味づけているか？に沿って考察する。

5.1. KARDS 各要素の相互関連性（RQ1）

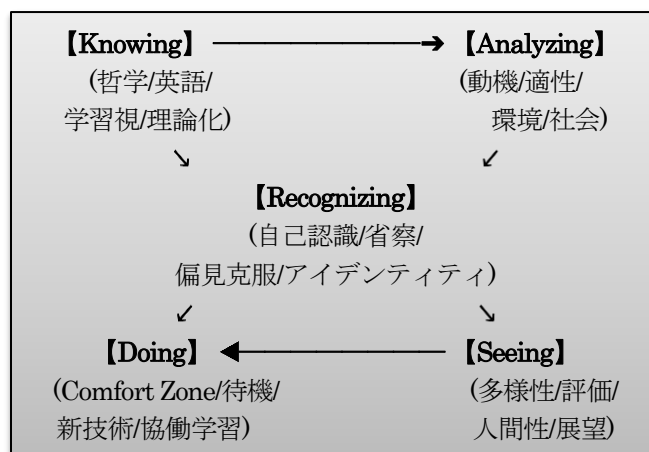
(1) Knowing から Analyzing へのつながり：固定概念の瓦解と実証的知見の獲得

M 教員の初期の知識基盤（Knowing）は、自身の学習経験に基づく英語教育の固定概念に依拠していた。30 代前半までは「自分が音声で覚えるのが得意だから生徒も同様である」と思い込んでいたが、多様な生徒と触れる中で文字を画像として捉える「視覚優位」の特性を持つ生徒の存在に気づかされた。この他者との「相違からの学び」により固定概念が瓦解し、自身の知識が実証的な学習者分析（Analyzing）へと深化・更新されるつながりが示され、そして学習者の特性や個別最適化を重んじる実証的な学習者分析（Analyzing）へと進化する過程が確認された。

(2) Analyzing から Recognizing へのつながり：環境の対比と深層心理の理解による自己変革

M 教員は、生徒指導重視の男子校から現在の経済的・能力的に恵まれた中高大一貫校への異動という両極端の環境を経験している。現任校の生徒が能力を有しながらも努力を継続せず妥協的な学校生活を当然とするマインドセットに対し、当初は好意的に見られない葛藤の期間を経験した。しかし、努力を重ねた自身の過去と生徒の現状を分析 (Analyzing) する中で、比較から生じる「恵まれた環境ゆえの生きづらさや自己肯定できない複雑な深層心理」に気づくに至った。他にも、自身がテニスのレッスンを一生徒として受講した経験から、教わる側の新鮮な立場を内省した。この分析と内省が過去の成功体験という偏見 (バイアス) を自覚させ、教員としての資質を高める自己認識 (Recognizing) への繋がりが示唆された。

KARDS による M 教員フレームワーク



(3) Recognizing から Doing へのつながり：教育哲学の具現化と新技術を用いた実践

「教員には多様な経験が必要であり、生徒一人ひとりに適性がある」という自己認識に基づき、M 教員の授業実践 (Doing) は一斉教授型から調和と個別最適化を重視するスタイルへと変容した。具体的には、グループワークにおいて習熟度の高い生徒を意図的に混在させる班分けの配慮や、生成 AI を英作文授業に導入する実践に現れている。AI へのプロンプト作成を生徒と考え、効果的なやり取りを板書で共有する実験的な Output の学びを展開しており、これは新時代の教育を探究する具体的な教授行為として具現化している。

(4) Doing から Seeing へのつながり：実践を通じた多角的観察と「待つ」姿勢の確立

日々の授業実践や課外活動は、学習者を深く観察するリサーチの場 (Seeing) となっている。若い頃は授業内の一面だけで生徒を断片的に判断しアプローチを放棄することもあったが、部活動や行事でリーダーシップを発揮し別人のように輝く姿を見ることで、英語力の高低だけで人間性を評価してはならないという本質的な気づきを得た。この多角的な観察を通じて、生徒自身が自律的に動機づけられるまで、状況を見守りながら辛抱強く待つという指導観が形成されていった。

5.2. M 教員における KARDS の運用的定義 (RQ2)

分析より、M 教員における KARDS の文脈的・運用的定義が以下のように明瞭化された。

- ・【Knowing】自身の経験を実践に応用し、固定概念を打破しながら新しい知見を統合する「動的な教育哲学」。
- ・【Analyzing】表面的な行動の裏にある「学習者の真実」や「Learning Comfort Zone」を見極めるための洞察。
- ・【Recognizing】学習者との対比から過去の成功体験が持つ偏見を自覚し、自身の資質を捉え直す「内省」。
- ・【Doing】生徒にとって心地よい環境を作り、協働学習や新技術を導入して学びを構成する「場づくり」。
- ・【Seeing】実践の反応を気づきとして、すぐに介入せず生徒の自律的成長を見守る「静的アプローチ」。

6. まとめと課題

本研究の事例分析により、KARDS フレームワークは英語科教員が自身の専門性を主体的・自律的に捉え直すための動態的モデルとして有効な分析枠組みとなり得ることが示唆された。M 教員の事例は、英語科教員の専門性が教科知識や指導技術にとどまらず、多様な学習機会の創出や学習者理解を含む複合的なものであることを示している。一方で、現職教員が管理業務 (進路指導等) や保護者対応に多大な時間と労力を費やしている硬直化した学校組織の現実や、働き方改革に伴う部活動外注化が生徒観察機会の減少をもたらすという新たな課題も浮き彫りとなった。今後は SCAT による質的分析をさらに重ねた上で、オンラインアンケートによる広域的な量的調査を実施し、一般化可能性の検証を推進していく。

引用・参考文献

- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会。
- 中央教育審議会 (2015) 『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について (答申)』文部科学省。
- Creswell, J. W., & Plano Clark, V. L. (2018). Designing and Conducting Mixed Methods Research. 3rd ed., SAGE Publications.
- Kumaravadivelu, B. (2012). Language Teacher Education for a Global Society: A Modular Model for Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing. Routledge.